

禁止カード使いまくる
子ども大好きです。

足倉ヨバラ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

主人公くんこと小鳥遊ユウくと、ヒロインこと城戸辰火ちゃんはまったりほのぼの暮らしていた（当社調べ）

たまにヘルメット被ったおっちゃんに絡まれたり、バリアン警察と遊んでたりするけど、うーん今日も平和だ……

だいたいこの2人がデュエルするだけの作品となります。でも基本はユウくんばかりになりそう。理由はタイトル。

なんやかんやあってユウくんはデッキを順番こに使ってるけど気にしないで！大丈夫！ちゃんとデッキ一つ一つのこと信じてあげれる人だから！

※注意事項！

- ・主人公はいろんなデツキつかいます。
- ・ヒロインがこれでもかというほど禁止制限を無視します。許してあげてください。
- ・ルールは基本OCG準拠だけど一部アニメルールもありますのでご容赦（例：表側守備表示での召喚）
- ・デュエル中にペチャクチャ喋ってますが、広い心と小説だからということ許してくださいこれもドン・サウザンドってヤツの仕業なんだ！
- ・原作とは一応同じ世界線。ただし、歴史に名前が残ってるだけで登場はたぶん無し。

目次

設定という自己満晒し	1
神をも恐れぬ人の子……や、君たちは自	
重してくれ	7
小鳥遊ユウのユウは『匹夫の勇』のゆうな	
んですって	21
唐突だが、カセキホリダーで恐竜の名前	
を覚えた人	41

設定という自己満晒し

小鳥遊ユウたかなし

星17 / アホの子属性 / 寝るときパジャマ着る族

ATK 2500 / DEF 0

一応主人公。

デュエルアカデミア大学部総合学科。

苦手なものは辛いもの。

言動ひとつひとつにアホが滲み出る生粋のアホ、というか全体的に子供っぽい。

一応これにも理由はあるが、考えるのめんどいしよーもない理由なので本作では割愛

！

全体的に辰火好き好きbotで、好きあらば愛を叫んでいる。

ひとつのデッキを極めるのが基本のこの世界において、珍しい複数のデッキを所有している人物でもある。

まあ実際のところ、カードの方から寄ってくるせいでデッキを組まなきゃという焦燥感に駆られた結果とも言える。

禁止カードを大量に使う辰火ちゃんに毎度ボコボコのボコにされてるせいかなデュエルの腕はかなり立つ、しかし負ける。

そして、彼を主人公たらしめてめているのが何を隠そう髪型。

カブトガニをギザギザさせたものが乗っかってるイメージをしてくれれば、だいたいそんな感じ。

使用デッキ

・時械神

・メタファイズ

・真竜皇

∴随時更新!!

城戸辰火きとたつひ

星13 / 我らが女神属性 / 強欲な生還の天使族

ATK いちおく / DEF いちおく

一応ヒロインにして我らが女神様。

デュエルアカデミア大学部ビートダウン学科。

好きなものは辛いもの。

斜光を反射して七色に輝く銀色の髪、その髪はひとつとして同じ光を放たぬ神が作り
たもうたこの世の神秘。

双彩に煌めくエメラルドとサファイアの瞳、その瞳の美しさに色は喜び光は涙し宝石
すら息を飲む。

そして、その美神もかくやという髪と瞳に黄金のごとき命を吹き込む完璧の権化とも
言うべき御尊顔。

(本編第2話より ユウ談)

そんなこんなで、兄はシスコンに目覚め、ユウは好きに狂い、その他アカデミア内外
問わず非常に人気がある。

普段は身内以外とデュエルを全くしないミステリアス醸し出してる月下美人なのだ
が、その実態は新旧問わず禁止カードとつよつよカードをデッキにぶち込むヤベーや
つ。

先行ではとんでも制圧で、後攻では殺意ばかりが満ち満ちるワンキルでヌッコロして
くれるぞ!!

使用デッキ

・光天使十二獣タイネプホープゼアルドラグリーン

デッキレシピ (2020年12月現在)

・モンスター

十二獣モルモラット×3 (制限)

十二獣ラム×2

十二獣ヴァイパー×2

十二獣サラブレッド×1

十二獣ラビーナ×1

The tyrant NEPTUNE×1 (禁止)

光天使スローネ×2

光天使セプター×1

ブラック・マジシャン×1

真紅眼の黒竜×1

灰流うらら×2

増殖するG×1

デイメンション・アトラクター×1

・魔法

強欲な壺×3 (禁止)

天使の施し×3 (禁止)

十二獣の会局×3 (制限)

次元融合×2 (禁止)

ソウルチャージ×2 (禁止)

墓穴の指名者×3 (準制限)

いたずら好きな双子小悪魔×1 (禁止)

簡易融合×1 (制限)

真紅眼融合×1

RUM | アストラル・フォース×1

・罨

無限泡影×1

・エクストラデツキ

十二獣ブルホーン×2 (禁止)

十二獣タイグリス×1

十二獣ドラংশシア×1 (制限)

十二獣ハマーコング×1

十二獣ライカ×1

十二獣ワイルドボウ×1

- F N o . 0 未来皇ホープ×1
F N o . 0 未来竜皇ホープ×1
N o . 3 9 希望皇ホープ×1
S N o . 0 ホープ・ゼアル×1 (禁止)
N o . 1 6 色の支配者シヨック・ルーラー×1 (禁止)
捕食植物ヴェルテ・アナコンダ×1 (制限)
超魔導竜騎士ドラグーン・オブ・レッドアイズ×1 (禁止)
L L - インディペンデント・ナイチンゲール×1

神をも恐れぬ人の子……や、君たちは自重してくれ

時は1999年、世界は混沌が渦巻く絶望の坩堝るっぼに……

「違う」

ライディングデュエル、それはスピードの世界で進化した決闘……そこに命を懸ける伝説の痣を持つ者たちを……

「呼びません。つか、あつてるけど違う。」

……今は昔、竹取の翁といふものありけり。

野山に混じりて竹を取りつつ……

「だれがかぐや姫やれつつた。いい加減真面目にやらんかいコラ」

（・ω・）仕方ないなあ……

時は21世紀、政治はおろか交渉、コミュニケーション、善悪、喧嘩……などなど、ありとあらゆる物事がデュエルで決まる時代。

世間ではサツにデュエルで勝てば見逃して貰えることは当たり前だったり、デュエルで世界が真つ四つになったりとなんやかんや色々あるものの、最早生活の一部として

完全に溶け込んでいるトンデモ化け物コンテンツ デュエルモンスターズ。

そしてそこに命を懸ける伝説の痣を持つ者たちを……

「いい加減しつこい。ただただシンプルに殴るぞ」

怖い怖い。

あ、怖いついでにこんにちは、わたくし小鳥遊ユウと申す者にござんす、以後お見知り置きを。

そしてこつちのさつきから物騒なこと口走ってるどう足掻いても主人公になれない
性格No.53なこの子は城戸辰火ちゃんです。
ナンバース
キドタツヒ

「だれが主人公になれないって？」

「突っ込むとこソコ？」

ともあれこんな2人が送る自らの世界を懸けた全面戦争や破滅の未来を変えるための戦いとかはしない、クツソ緩い感じでデュエルしていく物語であるツ!!

さてさて辰火ちゃんよ、早速だが質問よろしい？

なして我開始1分ちよいで我々はサツに囲まれているのでしょうか？

なんか悪いことしたっけ？

「自分の胸の内に問いかけろアホ」

なるほど、もしもくしもう1人のボク？

ボク1 『なんの心当たりもない』

ボク2 『アレじゃね？あのエセ不良みたいな奴らの』

ボク3 『あくあの、辰火ちゃん取っ捕まえようとしたけどボッコボコにされてその腹いせとして「やーいお前の彼女ゴッリッラッ」って煽ってきたけど結局それがご本人近くにいる時だったからもう一回フルボッコにされて今度は2週間くらい辰火ちゃんの舎弟になるとか言い出したはいいけど何する訳でもなくただただ多方面に喧嘩売りまくった挙げ句実際たいして強くもないから恨み節だけ残して逃げた』

ボク3 『あのエセ不良？』

ええ長い長いぞボク3！そんな説明口調でどんなことがあったか読者に懇切丁寧伝える必要なかっただろ！

お陰で思い出したけど！ありがとう！

「君たちがセキュリティに攻撃宣言をした犯人だというのはわかってる！大人しく同行してもらおうか！」

……どーする辰火ちゃん？

「……やつてから話すか。今じゃ話しても信じて貰えないし」

賛成！

という訳でだ！セキュリティの皆様、我々はその犯行声明に関して無関係の清廉潔白

だということを主張すべくデュエルを申し込みます対戦宜しくお願いいたします!!

あ、申し遅れましたワタクシ小鳥遊ユウと申します以後お見知り置きを!

受けとれえい!C(^ω^)E名刺

「あ、ああ……(なんかもう関わるのメンドクセエ)」

「デュエル!!!」

セキュリティ LP8000

VS

小鳥遊ユウ LP8000

「まず私のターンだ。『ゲート・ブロッカー』を守備表示で召喚する。カードを3枚セツトしターンエンド!」

ゲート・ブロッカー

星4/地属性/岩石族 ATK 100/DEF 2000

いつもの。

毎度のことだけどセキュリティってゲート・ブロッカー好きだよね、守るにしたって

もうちよいましなのあるだろうに……

「デッキは支給されたお粗末なデッキらしいのだが、それでいいのか治安維持。ともあれデュエル再開。」

「オレのターン、ドロー！」

「（1枚は攻撃するモンスターを除外する『次元幽閉』、相手モンスターのコントロールを奪う『大捕り物』、そしてお互いの魔法カードを全て無効にする『王宮の勅命』、モンスターには恵まれはしなかったがこれならば！）」

「うわあ、なんか伏せカード見てすっげえニヤニヤしてるよあの人……」

「あそこまで分かりやすいと寧ろ疑っちゃうだろ！やめるよな極めて純粹無垢な子供は騙されそうになっちゃうんだぞ！」

「ともあれ邪魔なのでアレ退かしますか。」

「てつてれ〜『ハーピィの羽根帚』〜」

「無駄だ！リバースカードオープン『王宮の勅命』！このカードがある限り、お互いの魔法カードの効果は全て無効となる」

「手札からカウンター罠発動『レッド・リブート』」

「ナニ!?手札から罠だ?!」

「LPを半分払って手札から発動するよ、相手の罠カードの発動を無効にして再セット

させる。デッキから好きな罫を付せれるから安心して（暗黒微笑）」

まあ伏せても羽根帯で破壊するんだけどさ。

はいそこ「なに二次創作の分際でガチカード使ってるの？」みたいな目をするんじゃない、特に辰火ちゃんやドン引くんじゃありません何回も見てるでしょうが。

というわけでお掃除完了、さてさて残るは手札なんだけども。

「バカな……だが、まだ私にはゲート・ブロッカーが残っている！このターンさえ凌げれば！」

お馬鹿なのかな？

こんなん手札誘発無いつて言ってるようなもんじゃないすか、嬉しいから好き勝手しちゃう、子供だもの by たかなしゆう

「んじゃこれ。このモンスターは自分フィールドにモンスターが存在しない場合、リリースなしで召喚できる。かもん『時械神ミチオン』！」

時械神ミチオン

星10／炎属性／天使族 ATK 0／DEF 0

「レベル10のモンスターをリリースなしで召喚だど!?だがそのレベルも所詮はこけお

どし、攻守0で何ができる！」

「こいつは破壊されず、自分への戦闘ダメージは0になる。そして、攻撃したバトルフェイズの終わりに相手のLPを半分にするのだ。あ、おまけで『光神化』で手札からもう1体出しとくね。そんじゃバトルじゃ、いけーい！」

セキュリテイ

LP8000?LP4000?LP2000

「グウツ!!破壊もされずダメージも与えられんとは面倒な……しかし耐えたぞー！」

「とりあえずバトル終了だけど……大丈夫?」

「ここでの「大丈夫?」とは、「別に実体を持っていたりだとかしてないはずなのに胸元なんて押さえて頭大丈夫?」の意だ。

熱を感じたり衝撃とかは来たりもするけど、胸元押さえる要素どこにもなかったよね?ミチオンの攻撃方法って炎を飛ばすやつだよね?」

しかし悲しきかな、心の内を抑えておくことの出来ない私はここまでのことを全部声に出していたのです!

ゴメンね テヘッ (>ω<)ゞ☆

「貴ツ様アアアアアアアア!!今泣かしてやるから待つてろ!私のタ——」

「ちよい待ち、その前に我は時械神ミチオン2体でおーばーれー、エクシーズ召喚。

『超弩級砲塔列車！グス！タフ！マアアアックスツツツ！！！！』
ちようどきゆうほうとうれつしゃ

超弩級砲塔列車グスタフ・マックス

ランク10 / 地属性 / 機械族 ATK 3000 / DEF 3000

「今さらの攻撃力3000のモンスターを出して何になる！もうバトルは終わっているぞ！とつととターンを渡せ!!」

「慌てない慌てない、グスタフ・マックスの効果。オーバレイ・ユニットを1つ使って、1ターンに1度、2000ダメージを与える」

「……え？」

「え？」

「……え？」

は〜い辰火ちゃんに問題ででん！

2000—2000はなーんだ？

答えはCMの後d…びゃあ我慢できねえ！そうだね0だね！

「聞いたならせめて待てよ……」

どうせ無言決め込むでしょうがぁーた。

はいという訳でこれにて終わり、あなたに希望などないのです……安らかに眠りなさい（さつきまで頭大丈夫？とか言ってた奴のセリフ）

顔面砲、射出！

「ぐああああああああ!!」

セキュリテイ

LP2000 ?? LP0

「たつたーターンで！ワンターンキルウ……」

「あんなモンスター勝てるわけねえ！俺は逃げるぞ！」

「俺も逃げさせてもらいます！悪く思わんでください！」

あららら、みーんな逃げちゃった。

ご丁寧に両手を上げてドタバタと、そりやあもう天晴れという他にない、素晴らしいほどに分かりやすい逃走。

思わず拍手をしてしまうほど。

さて、追っ払いやしたげ辰火ちゃん、ご褒美ちようだい。

具体的には夜のデュエルでグボア!!!

「ぶん殴ったぞ」

『『ぶん殴る』と心の中で思ったなら、その時ステに行動は終わってる辰火ちゃんであつ

た……そんな辰火ちゃんも好きです！愛してる！フォーリンラブ！」
「なら私とデュエルで勝てば……いいよ？」

ツシヤア！言質録ったどく！！

ソオイ！（　　ω　　）　　E録音テープ　　一壁

うわあーい！いまの一瞬で録音テープぶっ壊されたけど。悲しみ。

ああ……辰火ちゃんの生声収録言質テープが……ひどい、この子もう内定決まっていたのに、俺の子守唄として。

しかし、最早そんなもの必要ない！今日ここでデュエルに勝てば良い、それだけのことよ！（フラグ）

それでは……

「デュエル」

「デュエツ!!」

く20分後く

「なん……だと……？」

ボロ負け……神を操る、この私が……？

いや、今回は時械神は使っていないけど。

諸事情により同じデッキを2回連続では使えないので、今回のデュエルでは「メタ
ファイズ」を使つたんだが……

くそう！くそう！

ズルいぞ辰火ちゃん！いくらなんでもそれはダメだつて！そのデッキじゃ無理だつ
て！

なに？「格上だろうがその上で勝つてみせる者こそ真のデュエリスト」？「運命のド
ローが出来ないお前が悪い」？うるせえ！じゃあジャンケンでチョキがグーに勝てる
かつてんだよ！（暴論）

え……部分的に勝てる？やー私グラップラーじゃなくてグダツプラーだからちよつ
と……

「ねえユウ……」

「ん？」

「デュエルつて、楽しいね!!」

笑顔……毎日ダレてる辰火ちゃんの、まるで灯火のように暗闇を照らすかのごとき眩
しい笑顔。

長年も一緒にいるのに未だドキツとするのは、その笑顔が本当に綺麗だからだと思

う。

そんな笑顔で、そんな真つ直ぐな言葉……普段の辰火ちゃんなら絶対にしない。俺だけが知っている辰火ちゃんの一面。

「辰火ちゃん……」

「じゃあまず禁止カードぶっこむのやめようか!!?」

そう、彼女こと辰火ちゃんはとっても可愛い。

……禁止カードを使うこと以外は。

く回想く

『天使の施し』3枚ドロイーして2枚捨てる』

『いたずら好きな双子悪魔』1000払ってランダムに1枚、お前が1枚、それぞれ選んで捨てさせる』

『十二獣の会局』から会局を破壊してデツキから『十二獣モルモラット』。モルモラットに重ねてX^{エクシズ}召喚。『十二獣ハマーコング』。更に重ねて『十二獣タイギリス』。オーバレイユニットを1つ使って効果発動。モルモラットが素材となつている時、デツキからモルモラット1体を特殊召喚。さらに重ねて『十二獣ブルホーン』。もう一度オーバレイユニットを使ってデツキからモルモラット。ブルホーンの効果発動、オーバレイユニットを1つ使い、デツキから『十二獣ヴァイパー』を手札に加える。更に重ねて『十二獣ワイルドボウ』。もう一回重ねて『十二獣ドラシア』。モルモラット2体でもブルホーンを出して、オーバレイユニットを使って『十二獣サラブレード』を手札に。ブルホーンに重ねて『十二獣ライカ』。ライカの効果で『十二獣ラム』を蘇生させ、そしてドラシアの効果発動。オーバレイユニットを1つ使うことで『十二獣ラム』を破壊する。ラムは破壊された時、墓地から他の十二獣を特殊召喚できる。私はハマーコングを墓地より特殊召喚。私はハマーコングとライカで、オーバレイ! 2体のXモンスターでオーバレイ・ネットワークを構築! X召喚! 現れるF^{フューチャー}N^{ナンバース}000! 『未

来皇ホープ』！さら私は未来皇ホープで、オーバーレイ・ネットワークを再構築！エクス
シリーズエンジ！これが、これこそが、私の……全！力！だああ！！『FフューチャーNナoンoバoーズ』

「ちよいちよいちよい待て待て待て!!」

「ん?」

あ、首傾げる動作も可愛い……じゃなくて！

突っ込みどころが多すぎる！

どこから突っ込みやいいんだよこれ！俺は喉から。

あー……うん、最適な言葉あったわ。

今の辰火ちゃんにぴったりなセリフが。

「辰火ちゃん……」

リミット・レギュレーションって知ってる？」

小鳥遊ユウのユウは『匹夫の勇』のゆうなんですって

「……あゝ……」

目元に朝を感じ、俺は起きる。

目元に差し込む朝日で起きる朝は、なかなか気分が悪うございます。

しかしベッドは床に固定されていて動かすことができず、毎朝不本意な朝日の抱擁によつて起床させられるのだ。

北枕は落ち着かないので、早いとこ遮光カーテンが欲しいものである。

残念なことに今日も晴れのようなので、二度寝は諦めて体を起こす。

「嗚呼、忌わしや。我ら幽世かくりよの焰ほが小賢ともしびしき灯火を滅する時ぞ……端的に言えばファツ

キン朝日」

「朝からなに呪詛のろまじつてんの」

「今の内に闇墮やみだちフラグ立ててところかなと」

その時、脳裏にあるヴィジョンが浮かんだ。

これは……ヒトデ?

それにクラゲとエビと、トマト?

あ、隅っこのほうで仲間外れにされたカニが泣いてる、可哀想に。
して、なんじゃこりゃ？

「そんなことより朝ご飯を食え。ほら」

「おおこれは……！」

焦げ一つない美しい仕上がり、形も申し分なし、人によつては正に垂涎ものとも言える逸品！

それは素晴らしいまでの……

……素晴らしいまでの……

「菓子パン」

そこには『新風味！期間限定レッド・デーモンズ・ドラゴン味』とのキャッチフレーズと共に赤黒く染め上げられたパンがあった。

分かってた……分かっていたさ……

でも、やっぱつれえわ……

「食べないなら食べさせてあげる。ほら、あーん」

ナニ！辰火ちゃんから、あーんをしてくれるだと！

これは！これは！食うしかねえ！たとえカミソリが入っていようと何らかの工程でエッジインプ・シザーが混入していたとしてもだ！

据え膳食わぬは男の恥！いざいざ！

「あー……ん。ありがたや、ありがたや辰火ちゃん!!？」

反射的に咀嚼が止まる。

本来なら辰火ちゃんからあーんしてくれたいものを咀嚼しないなど、あつてはならないことなのだが……だが!!

これだけは例外だ、辰火ちゃんのアーン補正を振り切っている。

俺の辰火ちゃん愛をも越えるもの、それは……

「『辛さで口からバーニングソウル、天地創造の叫びを上げよ!!』だつてさ、よかつたね」

「無理無理無理無理無理!!死ぬー水ー水ー水ー水ー」

たとえ辰火ちゃんからのアーンであろうと、辛いものだけは死ぬほど苦手なのです。

どれくらい苦手かというと、コンビニのピリ辛チキンを汗だくになりながら食べることになる程に。

そして世界とはそう上手くはできていないようで、事の発端となった辰火ちゃんは辛いのもの大好きな人である。

「……そ、んな辰火ちゃんも……好きだ……カフツ」

「あ、死んだ」

なんだ口からバーニングソウルって、口なのか魂なのか場所をはつきりして欲しいものだ。

つーか辰火ちゃんはなんでこんな劇物を所持していたのか、俺への嫌がらせのためだろうなあ（確信）

素面の時だところまであからさまなブツは断るの

知ってるから、あえて寝起きにやりおったな？

当の辰火ちゃんはいいい笑顔、くそう可愛いじゃないか。

「今日は朝から出かけるって言ってたけど、準備しなくていいの？」グイグイ

「……準備しますから、その劇物押し付けんのヤメテ」

そう、今日は朝からある人に呼び出されているのだ。

自分は遅れてくるクセに人の遅刻は許さん人なので、できれば余裕を持って出たいと思ってたんですがねえ！

いろいろと遅刻の言い訳を考えながら、可能な限り手早く支度をする。

サボるのはダメだ、何故ってサボりたいアピールしたらすぐ隣で辰火ちゃんがさっきのパン持ちながら凄んできたからですよ、分かったからそれ下ろして。

「んじゃ、そろそろ行ってくるね」

「ん、行ってら」

さて、Dホイールを走らせ向かった先は、ビルの多いこの街の中でも特に頭一つ抜けた無駄にでかいビル。

聞いた話によれば、400mくらいあるらしいのだが、法律とかもろもろ大丈夫なんだろうか？

「小鳥遊ユウ様、お待ちしておりました。此方へどうぞ」

「ういうい、ありがとう」

そして通された所は向かいの壁一面がガラス張りになっている部屋。

この部屋からは街が一望できるらしい。

仕事するには落ち着かなそうだなーとか思っていると、社長椅子をクルッと回し、あつちから話しを切り出してくれるような雰囲気を出した。

「久しぶりだな……ユウ」

「ああ……一年ぶりくらいか、乾さん」

……ここは、城戸グループ本社。

城戸グループとは、カードの製造をしている インダストリアル・イリユージョン I 3 社からカードデザイン

を委託されており、その規模はまさに世界レベルといえる。

そして、ここにいるのが、我が辰火ちゃんの実兄こと城戸乾 きどいぬい。

城戸グループ本社代表取締役 城戸乾その人である。

「お前たちは下がってろ。1対1で話しがしたい」

「はっ！」

ボディーガードも下げさせ、少しばかりの静寂が部屋を包む。

とりあえずソファアに腰掛け、言葉を待つ。

「さて……」

「……」

「いやホントひつさしぶりだなあ！ユウ！この一年間どうだった!？」

「どうもこうもありませんよ乾さん！相変わらず辰火ちゃんが連れなくて！」

「でもっ……」

「そこがいい！」

城戸グループ本社代表取締役の真の姿、それはシスコンだった。

シスコンと言っても『妹とは俺が結婚する！』的なのではない。

この人のシスコンのベクトルはだいぶ変わっていて、可愛い（ここ重要）妹が自分の袂から離れて幸せになることに快感を覚えるというある種の変態じみたシスコンである。

……本当の本当にどういふことなの？

妹の幸せで嬉しさの絶頂ならまだ分かるけど、妹の幸せに快感覚えるってまるで意味

がわからんぞ！

「いいねいいね！このまま義弟になっちゃいなよY O U！」

「お義兄さんってか、H A H A H A！」

「H A H A H A H A!!」

「……何やってんの？」

斜光を反射して七色に輝く銀色の髪、その髪はひとつとして同じ光を放たぬ神が作りたもうたこの世の神秘。

双彩に煌めくエメラルドとサファイアの瞳、その瞳の美しさに色は喜び光は涙し宝石すら息を飲む。

そして、その美神もかくやという髪と瞳に黄金のごとき命を吹き込む完璧の権化とも言うべき御尊顔。

うむ、間違いなく辰火ちゃんだ。

「ただいま辰火、二気にシてた？」

「殺す」スチャ……

「良かろう！俺が勝つたらユウと夜のデュエルね！」

「あ、そのノリこないだもやったんで」

「うそん」

「デュエル!!」

辰火 8000LP

VS

乾 8000LP

「僕のターン! まずは『強欲で貪欲な壺』! デツキの上から10枚を裏側表示で除外すること、デツキから2枚ドロ! そして『闇の誘惑』を発動! さらに2枚ドロし、『オルフェゴール・カノーネ』を除外する!」

乾さんが使うデツキは「オルフェゴール」、展開力のある強力なデツキだ。

先攻を取られた上、辰火ちゃんお得意のハンデス禁止カードがあまり痛手にならないデツキ、辰火ちゃんには少し厳しい対面になったが果たして。

あとどうでもいいけど、乾さんがオルフェゴールデツキを使ってるのに若干世界の意思的なを感じる。

具体的には作者のお遊びみたいなの。

「僕は手札の『オルフェゴール・トロイメア』を捨てて『ダーク・グレファア』を特殊召喚!」

ダーク・グレファア

星4 / 闇属性 / 戦士族

ATK 1700 / DEF 1600

「そのデッキの対抗策は既にしてる！手札から『ディメンション・アトラクター』を墓地に送って効果発動、次のエンドフェイズまで墓地に行くカードは全て除外される！これで……」

「させないよ辰火！速攻魔法『墓穴の指名者』！相手の墓地のモンスター1体を選択して除外し、そのカードの効果を次のターンまで無効にする！」

……初っぱなから火花が見えるような激しい攻防だ。

ともあれまず戦局を掴んだのは乾さん、禁止カードという一発逆転の切り札にもこの調子でいけばあるいは……と考えてしまう。

「ダーク・グレファアの効果発動！手札の『オルフェゴール・カノーネ』を捨て、デッキから『オルフェゴール・スケルツオン』を墓地へ送る。そしてオルフェゴール・カノーネは、墓地から除外することで、手札のオルフェゴールモンスターを特殊召喚できる。

こい！『宵星の騎士ギルス』！」

ジャックナイフ・オルフェゴール
宵星の騎士ギルス

星4 / 闇属性 / 機械族

ATK 1800 / DEF 0

「ギルスの効果発動！このカードの召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから機械族・闇

属性のモンスターを墓地に送る！」

「手札の『灰流うらら』の効果発動、手札のこのカードを捨てることでその効果を無効にする」

「まだまだあ！『オルフェゴール・トロイメア』の効果発動！墓地のこのカードを除外し、デッキから『オルフェゴール・デイヴェル』を墓地に送り、ギルスの攻撃力をデイヴェルのレベル×100ポイントアップさせる！そして手札から『終末の騎士』を召喚！召喚時、デッキから闇属性モンスターを墓地へ送る。『星遺物―星杖せいじょう』を墓地へ。星遺物―星杖は、墓地から除外することで除外されているオルフェゴールモンスターを特殊召喚できる。オルフェゴール・トロイメアを特殊召喚。そして……僕はダーク・グレファアとギルスをリンクマーカーにセット！」

……いよいよ来るぞ、乾さんのデッキが送る超ハイスピードデュエルが。

「現れる！星鍵の力秘めし悲しき歌姫！LINK―2！『オルフェゴール・ガラテア』!!」

オルフェゴール・ガラテア

LINK―2／闇属性／機械族

ATK 1800

「墓地のデイヴェルの効果！墓地から除外し、デッキからオルフェゴール・カノーネを特殊召喚する！そして、ガラテアのモンスター効果発動！除外されているデイヴェルを

デッキに戻す。その後、デッキからオルフェゴールと名のつく魔法・罠カードを1枚セツトできる。僕は『オルフェゴール・バベル』をセツト!」

「僕はガラテア1体でオーバーレイ!1体のオルフェゴールリンクモンスターで、オーバーレイネットワークを構築!エクシーズ召喚!

天穿つ遙か高き塔……悲曲奏でし楽団と交わりて、黄泉と共に己が自我^{エゴ}を断ち切らん!宵星の機神^{シー・オルフェゴール}デインギルス!!」

宵星の機神^{デインギルス}

リンク8 / 閥属性 / 機械族

ATK 2600 / DEF 2100

「なっ!リンクモンスター1体だけでエクシーズ召喚だど!」

「……いっつもそれ言ってる」

やー、こういう新鮮な反応っていうの?こーゆーのも必要かなーって。

実際、乾さんめつちや得意げだもん、なんかもう満足げだもん。

ほらほら辰火ちゃん、集中集中、まだまだ来るよ。

「分かってる」

「僕はデインギルスの効果発動!特殊召喚に成功した時、除外されている機械族モンスターである星遺物1星杖を自身のオーバーレイ・ユニットとする。だが……」

「……何をするつもり?」

「僕は終末の騎士、そしてデインギルス。をリンクマークにセット!」

「ナニ!?!」

ナニイ!?

折角出したデインギルスをリンク素材にするだとお!?

乾さん何を考えているのだ……?」

俺たちが驚いていることに疑問を感じるかもしれないが、乾さんとは何かと忙しかったり都合が悪かったりで二人ともあまりデュエルをしたことがない。

付け加えるなら、乾さんがこの「オルフェゴール」デッキを使い初めてたのはつい最近なので、経験があまりないのだ。

にしても……会社のトップとも言える乾さんがこんな意味の無いことをするとは思えない……何か裏があるはず。

まあ?ぶっちゃけて言うとおそこまで大見得切ってるから何かあるってバレバレなだけだよ。

「(っ)いいーLINK―2! 『I:Pマスカレーナ!』」

I:Pマスカレーナ

LINK―2 / 閨属性 / サイバース族

ATK 800

「更にレベル1『オルフェゴール・カノーネ』にレベル7『オルフェゴール・トロイメア』をチューニング！シンクロ召喚！レベル8『ヴァレルロード・S・ドラゴン』^{サブージ}！S・ドラゴンの効果！墓地からリンクモンスター『オルフェゴール・ガラテア』を装備し、その攻撃力の半分を自身の攻撃力に加える！更に、そのモンスターのリンクマーカーの数だけヴァレルカウンターを置き、それを1つ取り除くことで相手の効果の発動を無効にする！」

ヴァレルロード・S・ドラゴン

レベル8／闇属性／ドラゴン族

ATK 3000 ?? 3900 / DEF 2500

「僕はセットしていたオルフェゴール・バベルを発動し、カードを1枚伏せてターンエンドだ」

乾さんのフィールドはI:Pマスカレーナとヴァレルカウンターの2つ乗ったヴァレルロード・S・ドラゴンの2体、そしてフィールド魔法『オルフェゴール・バベル』とセットカードが1枚。

先攻1ターン目、しかし何度も辰火ちゃんからの妨害を受けつつも手札を全て使いきった長い長い1ターン。

フィールドのモンスターこそ2体だが、あのオルフェゴール・バベルというフィールドも気になる。

どう出る辰火ちゃん……？

「ん？終わった？」

「うん、辰火のターンだ」

「ん、ドロー」

「『強欲な壺』で2枚ドロー。『強欲な壺』で2枚ドロー。『強欲な壺』で2枚ドロー」

うわあ……（ドン引き）

初手から強欲な壺三連打ですかい辰火さん……しかもドローしたカード確認しなかったから最初から3枚あったぞありや。

実質初期手札9枚のデッキ28枚スタートって、マ？

「私のフィールドにカードが無いことで、手札から罠カード『無限泡影』を発動できる。

相手モンスター1体を対象に、その効果を無効にする。S・ドラゴンサベージを無効に」

「くっ……仕方がない、ヴァレルカウンターを使い、その罠は無効だ」

「永続魔法『十二獣の会局』を発動。さらにその効果を発動し、デッキから『十二獣モルモラット』。モルモラットに重ねてX召喚、出でよ『十二獣ワイルドボウ』」

「カウンター罠オーブ！『神の宣告』！ライフを半分払い、その特殊召喚を無効にする

！」

乾 8000LP ?? 4000LP

「手札から『光天使セプター』を召喚し、効果発動。更に光天使が召喚・特殊召喚された場合に手札の『光天使スローネ』の効果も発動する」

「なんとしても、流れは渡さない！墓地の『オルフェゴール・スケルツオン』の効果発動！墓地のオルフェゴールを特殊召喚する！黄泉よみがえ還れ！『宵星の機神デインギルス』！」

「……その効果、相手ターンに発動できたっけ？」

「いいや、こいつらのテキストにはそんな事は書かれていない。だが！『オルフェゴール・バベル』が存在することで、オルフェゴールモンスターの効果は相手ターンでも発動を可能にする！」

「……そういうことか！」

なぜ乾さんが、わざわざデインギルスを素材にしたのか。

デインギルスの効果は、除外されているカードをオーバーレイ・ユニットとする他に、もう一つあった。

それは、特殊召喚に成功した時、相手モンスター1体を墓地へ送る効果だったはず。

そう、勘のいいデュエリスト諸君なら察しがついただろう。

X召喚、ではなく、特殊召喚なのだ。

この一言の違いにより、デインギルスは墓地からの蘇生でも効果を使用できる。

……乾さん、ここまで考えてあえてデインギルスをリンク素材にしたのか。

「その……え……デインギルスって言ったっけ？それを対象に速攻魔法『墓穴の指名者』」

「あつ……」

「チェーン処理により後の奴から順番に処理していく。デインギルスは除外され、スケルツオンの効果は対象を失い不発。スローネの効果で手札から特殊召喚し、1枚ドロ、セプターの効果でデッキから光天使を手札に加える。もう1枚のセプターを手札に。そして手札に加えた、セプターの効果発動。光天使の特殊召喚により、手札から自身を特殊召喚と1枚ドロ」

辰火ちゃんのデッキでここから出てくるのは……あいつか、あいつだな。

だがしかし……。

「私はセプターとスローネをリンクマーカーにセット！」

「何故だ！何故X召喚をしない!?セプターの効果は、このカードを素材にX召喚をしたモンスターに、フィールドのカードを破壊し1枚ドロする効果を与えるはず！」

「いや、エクシーズよりリンクの方が今は良いからだよ……それに、破壊されると少し都合が悪い」

「それはどういう……」

「いまから見せるから黙って。LINK―2『捕食植物ヴェルテ・アナコンダ』。ヴェルテ・アナコンダの効果、まずライフを2000払う」

辰火 8000LP ?? 6000LP

「そして『融合』か『フュージョン』と名のつく通常魔法または速攻魔法をデッキから墓地へ送り、その効果を使用する。ただし、それ以降の特殊召喚はできなくなる」

「おい……まさかとは思いが……」

『レッドアイズ・フュージョン』

『レッドアイズ・ブラックドラゴン』

『真紅眼融合』を墓地へ送り、デッキの『真紅眼の黒龍』と『ブラック・マジシャン』を素材に融合召喚！こい！こい！これが私の新たな切り札！『超魔導竜騎士ドラグーン・オ

ブ・レッドアイズ』!!」

超魔導竜騎士ドラグーン・オブ・レッドアイズ

星8 / 闇属性 / 魔法使い族

ATK 3000 / DEF 2500

うわあ…… (本日二度目)

これたしか、最近禁止されたヤベーカードじゃん。

ヤベーってことしか知らんが、とにかくヤベー。

とまあ語彙力を失った人、どうも小鳥遊です (唐突な自己紹介)

「うへえ……やつぱりそれえ……」

乾さんが分かりやすく嫌な顔してる。

以前に聞いた話曰く、飲み会の席でノリと勢いでOKしてしまったが、目が覚めた後に海馬コーポレーションやI3社からこつぴどく言われた忌まわしいカードでもあるそう。

自業自得とは言わないお約束。

「ドラグーン・オブ・レッドアイズの効果、相手モンスター1体を選んで破壊し、その元々の攻撃力分のダメージを与える」

「そして……?」

「この効果は、1ターンの内に融合素材にした通常モンスターの数だけ発動できる」

「ブラック・マジシャンと真紅眼の黒龍は両方通常モンスター、よって2回効果を使える」

乾 4000LP ?? 3200LP ?? 200LP

「ドラグーン・オブ・レッドアイズでプレイヤーにダイレクトアタック! 『黒炎魔導弾』」

!!!!

乾 200LP ?? | 2800LP

「あ、おまけ。セプターでもダイレクトアタック」

ブラックメカフレア

「え」

乾 — 2800LP ?? — 4600LP

ひでえ……

辰火ちゃん、まじばねえツス、マジリスペクトツス、一生ついていくツス。

なお辰火ちゃんの心にリスペクトなどありはしない模様。

私は勝利をリスペクトする……!とか言い出しそう。

そして後から黒歴史になってベッドの上でゴロゴロ悶える様を想像するとめっちゃ可愛い。

なにこの可愛い生き物。

「そーいや、どして辰火ちゃんはここに来たの?ここ来るつて言つたっけ?」

「机の上にこれ見よがしに手紙おいてあった」

「あらら……」

あら?

でも仮に見たとしてなんで来たのかという理由になつてないのでは?

「……新しいサンドバッグが欲しくて」ピイツ

FUUUUUUUUUU!!!

辰火ちゃんの赤面顔ピイツ!頂きましたあ!!!

ありがとう父様母様……俺、生きててよかった、人で本当によかった……

誰が言ったか考える輩！誰が言ったか可能性の獣！

我遂に、此処に貴みを見出したり。

感情という概念があることに今！御海が如き深き感謝の意を示そう！星を貫くが如き遥かなる親愛の意を示そう！

嗚呼、Number 39とはまさにこのこと、希望を越えその向こう側へ到達するは遥かなれば、人は未来を手にしよう。

かっどピングだ!!俺ええええぶしっ!!

ああ、おてんと様……いま、そちらへ……（冒頭でのやり取りを思い出しながら）

結局、辰火ちゃんにガラスの灰皿で殴られ気絶し、ボディガードの人に辰火ちゃんともども送って貰ったらしく、目が覚めたら見知った天井だった。

いやよく死ななかつたな、俺。

危うくちよつとした自慢の髪が折れるところだ、辰火ちゃんへのアピールポイントなのに。

にしても……

「はあ……好き」

今日も辰火ちゃんは可愛いのだった。

唐突だが、カセキホリダーで恐竜の名前を覚えた人

時はお昼時。

場所はデュエルアカデミアのデュエルドーム。

吹き抜けとなっていている天井からは、南天よりやや傾いた日光がドーム中央にあるステージをいつそう明るく照らしている。

ぐるっと360°。囲むように配置された観客席には、多くの教師、そして生徒たちが席を埋め尽くしていた。

その内、南側に座っている数人の生徒は対局にいる選手を、下卑た表情を浮かべて眺めていた。

その視線の先にいる人物、こと我らが小鳥遊ユウはというと……

やべーよ……先生たちめっちゃ見てるよ。

あれ校長先生じゃなかったっけ？その2つ隣の人はたしか生徒会長だよな？

なんでわざわざ見に来るのさ、暇なのかな？

あー……

柄にもなく、緊張していた。

どのようなにして、こんな状況になったのか。

これを説明すべく、時を遡る。

具体的には今朝まで。

——今朝——

小鳥遊ユウは学生である。

デュエルアカデミア大学部1年、総合学科。

冬季休暇が終わり、本日から新学期が始まる。

入学よりはや8ヶ月、なんとなく話し相手やグループはおおよそ固まり、講義やサークル活動なんかもだいたい馴染んでくる頃。

「今日も太陽が忌まわしい……太陽浴びると砂になるう……」

今日も今日とて太陽への恨み節が止まらない。

朝は太陽みたいなのじゃなくて、辰火ちゃんに起こしてもらいたい、もつと言えばキスで。

「……午前講義だ……よつ……こらせ」

今日は辰火ちゃんも午前中から忙しいらしく、不在なのだ。

うう……寂しいよう、ひもじいよう。

まあひもじいは嘘だけどき、さすがに3食食えるくらいの収入はある。

そんなこんなでアカデミアに到着。

いつものことながら時間が早いからか人は少ない。

いるとすれば、ちよつと遠くから来てる早朝から出発するような苦労人が俺みたいなの

暇人だけだ。

昨夜はなんだかんだ忙しかったので早めに行動しておこうと思つたらこれだよ。

いやはや、人生はうまくいかねえなあ……思つたとおりになんねえやなあ……

それはそうと、なにやら声が聞こえてくる。

声は三人、どうやら誰かにデュエルを吹っ掛けに行くようだ。

「——これで、こいつの効果でやってやれば」

「うおおおお！マジか！これむしろどうやって負けるんだよwwwwww」

「流石あつちゃん！デュエルの天才だわくビートダウン学科はヤベーわくwwwwww」

「あんな総合野郎とは違えんだよ、一緒にすんなタコwwwwww」

「確かにwwwwww」

……うーむ、なんだか盛り上がっているようになによりなにより。

なんでえ、てつきり『最高に高めた俺のデュエルタクティクスで、最強のデツキを作

り出してやるぜ!!』みたいなご都合的な超展開期待してたのに、失望したぞ名も無き大學生たちよ。

仕方がないから私はそろそろ行くかね、脚痛え座りたい。

「——これであの総合野郎を……小鳥遊ユウをボコる!!」

そんなこんなで講義の時間である。

偉人みたいな名前した人の口調移ってるけど気にしたら負けというやつなのである、慣れろ。

「なので、シンクロ召喚は他の召喚方法に比べリスクが大きく、安定性にかけると言われています。実際、世界大会でも……」

今はシンクロ召喚の講義中、内容はそこまで難しいこと言っていないんだけどなー、みんな目を閉じてもう一人の自分と対話してるなー（棒読み）

や、俺はいろんなデッキ使ってるから分かることも多いけど、ふつーにやったらシンクロ召喚はたしかに複雑で難しいかも。

決してイキってないですごめんなさい調子乗りました許してください。

「……で、不動性ソリティア論について——」

「邪魔するぜ！」

「な、なんだ君たちは！講義中だぞ！」

教室の前の扉から堂々と現れたのは、今朝楽しそうなおこととしてたトリオであった。学校にいたのに授業出なかったのかよ君たち。

んうー？

気のせいかしら？やったらこっち見てくるんだけど……

「ホモ？」

「違えよ殺すぞコラア！」

あら違う。

そんじやなんか要かえ？

「テメエが小鳥遊だな？」

「そうだよー、どしたの？」

「センセ、こいつ借りてくぜ！」

「え？」

「おら立て！ちよーつと俺たちと遊ぼうか？」

「え？あ、ちよ、待つて」

あーお客様！困りますお客様！

引つ張るなよ破けちゃうだろうが！まだあと3年半残ってんだぞ！

あー！あー！

……講義、出席扱いになればいいなあ……

「して、どしたのチミたち」

「バカには一言で言つてやろう、城戸辰火から手を引け」

「は？」

は？

……は？

あらやだ私ったら、一文字だけのセリフ多すぎ産業だわ。

して、どゆこつちや？

辰火ちゃんから手を引けて、急に言われてもねえ。

「しらばつくてんじやねえ！テメエが城戸辰火にちよつかい出してんのは分かつてんだよ！」

「あー……たしかにちよつかいだわ、あれ」

端から見れば、なんなら思春期真っ盛りの中学生レベルのちよつかいだわな、あれ

うーむ、俺としては辰火ちゃんに素直な気持ちを伝えてるだけなのだが、なにがいけないのだ？

あれか？もう少し欲望を隠せとか、そういうお話し？

「あれは俺の女だ、テメエみてえな落ちこぼれの総合野郎が手え出していい女じゃねえ」
「……それは辰火ちゃんが言った？」

「どつちでも同じだ」

ふむふむ。

つまりあれか？

『ボクも辰火ちゃん好きー！だけどいつつも近くにいる小鳥遊ユウが邪魔ー。辰火ちゃんもメーワクだろうし、せや！追い払ってボクが辰火ちゃんどくつ付くー！』

ってこと？

ふむふむふむ。

「やなことた！べー」

「この野郎……総合のバカどもはやっぱり、身体に教えるしかねえよなあ!？」
え、もしかして俺狙い!？」

やっぱりホモじゃないすかヤダー！

「デュエルでケリ付けてやる。俺が勝てば、城戸辰火から手を引け」

「負けたら？」

「俺が総合なんかに負けるわけねえだろ。今日の昼過ぎにデュエルドームだ」

— 昼 —

そして、現在に至る。

「逃げなかつたことだけは誉めてやる」

「ねえ、なして校長先生とかもいるの？ そんな大がかりにする必要あつた？」

「生徒は俺が呼んだ。だが先公は俺らじゃねえ」

まあ来ちゃつたもんは仕方ない、切り替えてこー！

さーてさてさて、来週のサ○エさんは！ もとい、今回のデツキはー……これだ！

「準備できたよー、そつちは？」

「……その生意気な口も今日までにしてやんよ！」

「デユエル!!」

ユウ 8000LP VS ビートダウン学科生 8000LP

「俺が先攻だ！俺は『可変機獣ガンナードラゴン』を召喚！」

可変機獣ガンナードラゴン

星7 / 闇属性 / 機械族

ATK 2800?? / DEF 2000

「こいつはリリースなしで召喚できる、攻撃力は半分になるがな。俺はカードを1枚伏せてターンエンド」

「俺のターン！ドロー！」

さてどうしようか――

「永続罨発動！『スキルドレイン』！ライフを1000払う代わりに、フィールドのモンスターの効果は全て無効となる！これにより、ガンナードラゴンの攻撃力は元の280に戻る!!」

ビートダウン学科生 8000LP??7000LP

あー……そういう。

この手札だと……このターンで突破はできないねえ。

こーゆー時は耐えるに限る。

ダイアグラム

「フィールド魔法『ドラゴニック D』発動！1ターンに1度、フィールドか手札のカード1枚を破壊し、デッキから『真竜』と名のつくカードを1枚手札に加える！手札の『真竜凰マリアムネ』を破壊し、デッキから『真竜皇の復活』を手札に加え、更に破壊されたマリアムネの効果により、『真竜皇バハルストス F』を手札に加える！」

加えるのはいいんだけど、出せない。

上級メインのデッキはこれだから怖いのだ。

時械神？この場合じゃほとんど機能しなくなっちゃうでしょうが。

「カードを3枚伏せて、俺はターンエンド」

「ククク……おいおい、デツキの作り方を知らねえってのはナシだぜ？」

「へーへー」

しっかしどうすつかな……防戦一方つてのもなんか納得がいかん。

スキルドレインとガンナードラゴンってのはいいと思うけど、完全に勝った気でいますねくおれは。

腹立つから分からせてやるう！次のターンになー！

「俺のターン！ドロー！俺はもう1体ガンナードラゴンを召喚するぜ！スキルドレインにより、攻撃力も2800のままだ！さあ……死ねえ！総合のクスが！ガンナードラゴンで攻撃！」

「永続罫カード『真竜皇の復活』！墓地から真竜モンスターを特殊召喚する！『真竜凰マリアムネ』を墓地より特殊召喚！」

「関係ねえ！ガンナードラゴンの方が攻撃力は上だ！ガンナードラゴンたちよ！行けえ！」

「痛え」

ユウ 8000LP??5200LP

痛えよ！バカだけど痛えんだよ！

心がよお……痛えんだよ、ジョン……

ジョー……カムバー……

早めに早めに。

早めにウチに嫁に来て辰火ちゃん。

※ここまで全部声に出ています

「た、ターンエンド……なにこいつ（ドン引き）」

聞こえてるよこの野郎。

客席からまだいぶブーイングが飛び交っているが、この私はそーゆーの気にしない人

だから！

……うん、気にしない、気にしない……うん……うん

ええい！とりあえずデュエル進行じゃオラア！

「俺のターン！ドロー！」

……よしよし、やっと動き出せるね。

見せてやろう！総合の落ちこぼれでも荒療治すれば嫌でも強くなれるということ

！努力で人は結構強くなれるということ！！

「ドラゴニック Dダイアグラムの効果発動！もう一度手札のマリアムネを破壊し、それぞれの効果

でデッキから2枚のバハルストス フューラー F を手札に加える！そして、バハルストスの効果発動！自分の手札及びフィールドの水属性を含むモンスター2体を破壊し、手札から特殊召喚する！手札のバハルストス2体を破壊し、手札からバハルストスを守備表示で特殊召喚！」

真竜皇バハルストス フューラー F

星9 / 水属性 / 幻竜族

ATK 1800 / DEF 3000

「ナニツ！総合のクズがレベル9の、しかも守備力3000のモンスターを召喚しただと!!バカな！」

「……バハルストスは水属性のみを破壊して特殊召喚した場合、相手の魔法・罠カードを2枚まで選んで除外するよ」

表側のスキルドレインは当然として、伏せていたのはモンスターを復活させる『リビングデッドの呼び声』。

これは除去してからで正解だった、あれを残しておくとは面倒なことになっていたことだろう。

「破壊されたバハルストスの効果により、デッキから『真竜皇リトスアジム デイザスター D』を守備表示で特殊召喚」

真竜皇リトスアジム ディザスター D

星9 / 地属性 / 幻竜族

ATK 2500 / DEF 2300

「更に速攻魔法『星遺物の胎導』せいぶつたいどうを発動！手札からレベル9のモンスターを特殊召喚できる！こい！『真竜皇アグニマズド』ヴァニツシャ！」

真竜皇アグニマズド ヴァニツシャ V

星9 / 炎属性 / 幻竜族

ATK 2900 / DEF 1900

「そんな……バカな……!?」

オオオー!!

客席からは歓声が上がります。

先程までブーイングをしていた生徒、同じ総合の生徒、果ては教師までもが一緒に上げる喝采。

だが、ここじゃない。

本当に盛り上がるべきは、ここじゃない。

「俺は！アグニマズド、リトスアジム、バハルストスの3体でオーバーレイ！」

V i c a r i u s —

「3体の真竜皇でオーバレイ・ネットワークを構築！」

F i l l i i i

「エクシーズ召喚！」

D e i i

「黙示録に記されし厄災よ、今こそ復活の時。六つの白翼翻し、六つの眼で神意を見極め、六つの頂きに君臨せん！」

『真竜皇V・^{ザ・ビースト}F・^{ザ・ビースト}D』!!!

真竜皇V・^{ザ・ビースト}F・^{ザ・ビースト}D !!!

リンク9／闇属性／幻竜族

ATK 3000 / DEF 3000

曰く、真。

曰く、竜。

曰く、幻。

曰く、皇。

曰く——獣。

その姿に、この場にいる者は凍りついた。

ただ1人、それを繰る者以外は。

「バトルだ」

「俺の負けだ…」

んえ？

なんだって？

俺は難聴じゃないけど、流石に数m離れた人の独り言を聞き取れるほどヘルテンパスト耳じゃないのだ。

ほらほら、大きな声で？

「俺の負けだっつってんだよこの野郎!!」

「ここらこら、デュエルは最後まで諦めないマインドじゃよ？天馬もそう言った、俺もそう言った」

「うるせえ！こ、攻撃力…3000なんて！勝てるわけえだろ！第一そいつを突破できる手段なんかねえっての！」

「ええ…（困惑）」

辰火ちゃんだったらこの状況でも問答無用で殺しにくるけどねえ。

手札補充えげつないからまあ、手札に止めるカードがほとんど来てるの。

この戦術も10回に1回、すんなりと通るかどうかってところすしオシース、通つ

でもそこから結局なにも出来なくなつてやられたことも1度や2度じゃない。

…まああの子と比べるのはなんか違う気がするが、まあヨシ！（指差し確認）

と、校長先生が立ち上がって拍手をしてくれた。

そしてなにか言いたげに咳払いをひとつ。

「見事なデュエルだった、二人とも」

あ、これはご丁寧にどうも。

「さて：ルール上、サレンダーは対戦相手が認めて始めて成立する。総合学科の小鳥遊ユウくんと言つたね？サレンダーを認めるかね？」

そーいやそんなルールがあつたねえ…

今はもう辰火ちゃん御用達カード（隠喩）だけど、昔にヴィクトリー・ドラゴンというカードがあつて、それがマッチに勝利する効果を持つてたから制定されたルールだとか。

俺も辰火ちゃんから教わつただけだから細かいトコ知らないけどね。

「いつすよー、サレンダーを認めまーす」

「そうか、では…勝者！総合学科の小鳥遊ユウ!!」

なんだかなあ…

俺つてば、最近まともな勝ち方してないなあ…

その後、辰火ちゃんから話があると云われ取り敢えず帰路を共にする。

いつの間にか時はたち、時間にして既に16時を回っていた。

冬場は日が落ちるのも早いこと風の如しとか考えてたら、辰火ちゃんが不意に話し始めた。

「またやっつたな？」

「…はい」

「面倒になるからやるなって、言つたよな？」

「…はい」

「申し開きは？」

「辰火ちゃんは自分の女だと言われて、カツとなつてやりました」

「それだけ…?」

「はい」

「…まあ面倒なの追い払ってくれたのは助かる」

「わーい」

それつきり辰火ちゃんは口を閉じる。

俺がやらかしたら、ここまですつものことなのだ。

…いつものことになるくらい、俺がやらかしてるとも言える。

夕日に煌めく辰火ちゃんも好きです。
結婚して。

「んじゃー」

「ん」

かくして、夕日に憂う辰火ちゃんは今日もかわいいのであった。